近代御會和歌集　八

和書門
二七九五七號　類
七七函
一三架
三〇冊

內閣文庫
和書類
二七九五七號
二〇一函
三〇冊
八架

内閣文庫		
番號	和	27957
冊數	30　(　8　)	
函號	201	98

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
colorchecker
x·rite
MSCCPPCC0817
MSCCPPPE0817
国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

明暦二年十月廿四日　御月次

竹霜

待恋

御製

中務卿智忠親王

冬ふかき枝[illegible]竹[illegible]霜の[illegible]

と[illegible]人の[illegible]

式部卿穏仁親王

[illegible]

明治十五年購求
内閣文庫

清くさかなる猶まつるよ秋をさかる寒如くと流をさまん人のみぞ

従大納言源唐通

夜深し竹の葉風の音すみて今朝か見る露の乱れ竹
竹の葉も声をさゆる竹の葉の音しも猶かな

藤原弘賢

青柳してりてもおもひ猶まよふ夏に心の竹の下風
あけてもいまださめぬ猶心の竹の露つもる夜の露

兼賢

まれかなる御園生の竹にそよぐ霜のよそと猶清き色に
ふくかおもふ音にまよふ中の夜の竹の葉に契ありしかな

隆量

風さゆる霜の竹のむら雀枝つたひぬる夜のかなしき
かけるにも秋の心も枝にかかりて枝を見し月の影
なきぬる夜もさきて夜ごとに竹の葉の霜
すみてもはやく猶もみさよの清きこゑきく

正二位菅原雅章

なれる竹の夜の葉を猶むかしにさゆる霜の夜
春の竹の音にとける色に秋の心のこもる夜に

従中納言具記

君の世の竹のかぎりなくさかえ行く色に猶もちとせ
君が代も人と共に竹の千代を契る言の葉

さむしろに庭の梢はみえ初て籬の竹にそよぐあき風
人しれぬ心をたれにかたるとや契もおかぬ山乃夕暮
資行
ゆふ月はかたふく影もそへて秋の下枝にさはぐ竹のはよ風
このくれも契し人と松の戸に音する風をきくそ悲しく
嗣孝
打なひく竹のさ枝のさよ風にちらしもあへぬ秋の空けり
あやなくも契し人をまつ夜はいとゞよそ松の嵐にこゑして
基福
きえぬ葉のみ山の宿のいかならん松の竹もさやく秋風よ

あさ人の姿もけゆく山乃端の月しもゆきて雨の夜はすし
俊廣
さ夜更し君参も志づくちゞく霧の色にあかす宿の呉竹
隔よら猶しげりつゝ武ふれともおりふしは秋風まさるかし
従二位藤原為業
こし秋の葉のうつろふにも竹にこゝろしらずてや露はをくらん
竹よりて竹ふき音乃見えも世の色を見せつる菊の若き
永桐
竹の葉はあまつ空をさへ霧の夜露にてもしろ色そ添るよ
さらでも秋の夕に心をもる秋もしけしかうかぶ宿の夜松かぜ

基賢

あはれさも君しらすして風さえて中々しも白花庭の白れ行
哀しまたそ人のまたれぬにほひ流しき音のさ枕そあり

雅房

きえやらぬみとらぬ色はまいはを経てもいくしもそれ宗の呉竹
情もうすくよりや白露なく又あらはとかゆくりてぞ社見え

正三位源有継

雨すくても氷るるなき行の跡まちと書きてくまよく秋風
侍まつは坂今は御名しらむとる代々宗と讃をきこしき

季通

朝日影いつる雲や霞みかれ竹のさ経くてみ色もそうらん
緑も経しはおろそ秋影しもとあらてあまるし象見たちる春

実昭

折やちり花影鳴の竹は色もあらく霞はちる秋風の空はさ
ちるまうなく今宵そ名をぬてるの神代梅まへいはち世の世

従二位藤原為縁

吹風の嵐はの音も月にして秋霞ある流し宗の呉竹
情人物よい声をぬ霞す流しいりしきの比ありやよ春

従三位清原相賢

呉竹よとく霞白きよれくいよりみとこそのうさかとも見る

ねよなよむかしもありつゝ秋をはまちえん人によいふかしてん

左近衛権中将藤原実維

風さゆるみなとの河よりとくれてゆくふねよりもうきをりの
舟をきてるとはての行舟に浦の泊に侍りて行月をみむ

兼茂

しもへらぬいくよの秋とかぞへても見えけるやとこの呉竹
わか行末をしも人やさしあはれ行すゑまさしき冬のうち

右近衛権中将藤原教康

呉竹のは末の秋の色をかうふりくるよはよきゆふ風
すゝしてしかはやすゝし人の方にも侍すてとはしらん

源具家

吹よせてなかれくりして秋ならとまみつゝ行の風のうきけさ
志かさく行末をはけるかいつしかよしけれしのふ代をもてまで

藤原実通

秋かくこゝもうきそしかく秋の色はてもあひく我の呉竹
くはすくもかけにきるゝねぐらへの月は行末のうきしなかしと

内大臣藤原言行

秋ふかきたつぬといはゝ村雨の羽風をはきなの行行
かくれてもうつるゆふかすかにゆく風の音きくやきもかしとはく

右近衛権中将藤原実起

照月の光ともいとゝ霜深行にほふ菊の色そさやけき
うつろひも猶あかぬ心かなまかきにそ霜をきてそ結ふまかきのよか

経光

有明の月とも見ゆる(?)いさゝか菊乃色こそ深く霜の花
さゆる夜は清さは猶まさる籬の菊をてらしそまさるまて

公説

秋行の菊から月を白妙に色添てる霜のさやけさ
影もなく残るなる霜にあらしより枝をかく人をまつらむ

源俊景

霜枯れし枝にも花の名残とて行の菊ひとつ匂ふなれ

いくよ霜結ても花はうつろはて菊にこそ見る色をつゝ

藤原季経

霜をさき行の菊につもる色白く秋の菊乃隠やとそらん
見せたや海の秋のくもりさして霜をき袖の月かけ

基時

吹そよく菊に風も吹そよく菊のこゝろ花の色
人ことに人に見ゆるてさしもしかるも秋の色ぬるしと

右近衛権中将藤原季定

白妙の菊の色も花の世にさやけき秋の色行
うつろ海にをとそ海にうつしのつる一よ二夜いかにたる霜

資忠

まかはきもさしもまた人も秋風の色をふかくする窓のくれ竹

しきたへの袖かはしてもねさめするあさ風に枕の竹はなりける

右近衛権中将藤原隆方

菊かさね露の月はた窓にしける竹のはかけに白露やおき添て

こゝろあるしれし夕の月影はまさに人の見えしよりそ遊し抱

有維

秋もなほいはまくら呉竹の夕風さへて風もなきけさ

今はやとりそしとそもかくなる窓のむら竹のさゆるやかなるさ

雅直

竹の葉末よりの月の影や見るらしき枝にとりまく窓の夕風

きりゝもかしまてはいりもかはしても見ゆる車にもしやつれや

源通福

夜ふかくさしこむ窓の呉竹の末はやく月に澄みてぞさける露

錦の葉よりはなちて窓にはしほれしにかはるさまにならしかしる

右近衛権少将藤原永俊

ゆふ暮をむかふるやこの窓の竹吹く風に露のよをや見

いかなる人の心に住けれしれ雨とあらそふ窓の夜

右近衛権少将藤原房清

さく雪の色よりもまして吹く窓の光も宿し庭のくれ竹

以上いぬこの夕暮れは跡ってし人いまはなき新の松の色

花人能登守兼順房

朝日かげ移ふるこそ夕暮れ竹乃葉末に露の色は見えしかり
跡かきを絶し夕へは出ても暮るゝ方人も見るさ池にたえて久しき

永貞

明けぬる月の光も色そへて霜のおけるさえのこる竹
端のあるにほひてそよ出たしく折さらしに絡むたちつ花

隆豊

新き月と見ゆまでむすぶや新竹の音は秋の風
思ふ人と語らて風の音にこそ待ちよるの床乃袖や露にぬれ

寛然

夕暮の涼しき竹よとりこそ新白さや香れ山がみゆるん
暮もはや流れ出し人はむすびそ跡ある月を袖にとどめぬ

為晃

清らなる暮れかな月にまくらて明けの光淡き窓の呉竹
なかし人いかならは語らは暮れなくてそゞろ夜の名ごりよしるこぬかな

明暦二年十一月十日　御月次百首

年を惜しむる　道晃

ともしか関の戸さゝて暮る年もおしむる逢坂の山

霞をとけく　雅章

たちかへる霞とかすむ春のゆく浅れ薫まよふ夢川
えりよわかその

たゆたふわれと

あきにいでけれ

梅かゝ
様乃ぬけ出
柳のまゆて　深量
春風に柳のまゆをひきそめるゝ人さきかけや見はわかん
三株の風け原　廣通
家はあるに猶し人見てさりし人の朝の夢てこゆる萩の枝原
木の花は春風
先さく花と

花とてもやむ　雅章
百穀や花りてもやし文人乃袖の香もへてもふ春風
花のちる花かて　弘資
身ハ我ちれ乃ちるもとを芳乃手折りをる君か春に初て
花のあるしや
賤なる花乃あるしやさて人の外ふまた何と何を見まさん
おもくそらす城
春の桜の多　為清

さりてみるやあれ春の秋の夏のもちにもなりぬ梅若

さ田乃山田哉

もゝ種の花乃　陰方

わすれては花とはいはじや山吹の春の野乃もゝ花の暮まけれと

なき跡て加茂河乃　実昭

春雨の降るの小山田にはみつ水もぬるくなりにけりの旅にふるかり

萩の下葉乃　雅康

おちる袖よ萩の下葉の露ちる名のみの花の涙はぬるそ

春の夕くれは　兼業

花鳥の外には色もなし我もこの春の夜は霞にしたへと

夏の衣もよ　為清

忘れよとうつゝに秋の花染乃かへ見けりな夏の衣よ

夏はみなとりの

夕ぐれ乃花の　嗣孝

夕かすみまよひの山陰も色そへて秋の花のにほひ一よかな

あさひて物名と

ほとゝぎす啼なり

けさこそ秋はちかけれ

夏の草葉に　季通

ゆく人や野中の涼に休むらん夏の草葉にくゝり添て

なでしこの花

風の涼しく　宗際

みれ人の袖に秋やさそふらん夏風の涼しくふくゆふ付

夏たつへしと　実起

ゆふされ川かはあさき風の涼しさに夏をへ出羽月を見る行

夜河秋近ハ　資慶

萩の葉にさやぐ河秋風さむくそよけりのゝいつ野への嵐

秋のたぬの　書銘

とりかへす秋の七草のなす草と帰りの虫の空にゐる霞

萩の葉そうそ

満秋の尾花に

野辺のあきちハ

色なき文や路ゆきし　　永栄

垣もとに色ある花ハむかひぬそれ秋の中ゆく路

幾代経し山の

庵さらぬは　　季賢

此比も賤か門田乃いほりそて庵もらすらん萱の屋の里

なにも衣物も色に

月のくまより　　弘賢

身にしむうら浦まつてむすふ夜の月も入るをかよふ秋風

てる月影の

月影おくれて

なかそも月に　　尭然

雲の浪まくらもむかし天河わたりし月にかゝりし跡ぞ

在明の月に

雁渡る雁や在明の月にゆくのはつかむかふさきの秋の中天

あさ日の影

名川秋霧

かさゝぎの羽は　為晃
白妙をかけるの羽まで草に霜かくれし秋とさうらま
あすも見ぬ人の
あき露せよあきなきみちゝれちるまでもえてかぎりまき秋草の山風
袖を見はらぬと
もえわたる秋や

ゝ流しゝも紅葉や旅人のきぬにかきかへしいのちかけし
時雨にぬるゝ
ちゝいの紅葉
袖のこほりは　貫行
さゆる日に谷の夜の森の葉をすてゝ袖の氷は猶ぞこほらん
宮川おしみ　季通
吉野川の秋風に嵐にきえわたりしもときは秋の白雲の上に
もえわたる

あき霜けり　雅喬

みつ瀬ハ岩のむすへる色も晴て猶しら浪の布ハけふはまたの名を
たえぬ思を

峯ハ花ともそ　基時

あさ夕へ峰ともね風のさそみあさ雪も花とそ散渡るハ女子
多く猶もさそまれ

奥の山も花をみさそまれ山ふもと多く一とせに花の名をとき
ゆかしハそれより　通茂

色の桜も散る山桜の山をこし浪のよるへき
清くも覚ハ入　為條

跡をハ花の露も袖にこそつもる花の雪と雪しそ
猶そ浪まれ　実維

多く花ちつて猶さく若き君に花ハ入そても人の心かし
人まれ覚ハ入　実昭

三とせ花をハ我身のきてめ桜ちる人の身の花のうき
いつ小野かな

美小みたえぬ　経光

さりともと待わしかの秋よりは夜ふかくなりぬ人をまつよ寄
こゝろいつき
おもひきりけりや　資孝
くるゝてしあはぬなをもおもひやなつさ御んはれ人のうちそて袂
ちいさそ後て　具起
袖をなくなくわいかそ帰れかし御さうしみりとる人のつきた
まれにあふよの
みすあしきれ　光然
あひミしは夢かとそ思ふ今はとて人の涙わしらぬ心中もいかり
去よし涙の　雅章
こぬ人の袖の別をいかにせしまふ涙のそれは流しを
なき偽と　俊景
つまとひもなきも惜しむらし思ひに泣けて帰りた心を
あひそふ人の　時量
世にふるも心をやなとしや名を川あひそふ人の中にかけれし
わかよの　教広
まよひ先ミし秋の山もとの月の秋も涙もてうつろふ人かなし
志かそ思ひした　通福

いかにせんこと葉はあやにおもひて恋しき人の袂

恋しき晴ふれ　具家

河の名はいさせはきにていつかに恋しき世をまて袖はぬる

いとふまにゆる　実教

情もわびし人やかならん都までいとふまにゆる命なき哉

とゆるなりけり

紛てうつ里舞　公親

今さらやわびて憐む人も我しよそに帰る人の出る

月ともかしる　為継

こたふまま君をそ祈る萬代かはらぬ人のうちにつきても

たのしみ小松　雅忠

山ふかみあさゆふ人の小松君が代の千代に祝ふしつかなりけん

こと祝の枝ゆる

見るきはのみや清

海辺の松　隆豊

君が代乃千とせをかけて松が枝に浦なみの松の色も久しからん

多門の常なる　永真

あらし吹も哥よむ難波かな吹く風やいかに定けにけり

ゆきかへるの

逢坂の山城はやしの夕暮にゆきかへる人の数そ見えける

嵐のあらしれ

谷の岩清水や　相貫

山川の岸きよく清よ水を流ハ谷にの音の淵や春にとみん

草の戸さしれ　永俊

さらて谷山路を清きりゆきかへる小草の戸さしの風とせしかく

新の玉水　雅為

文からにとめて梅吹ふ三ハうりにおまき梅を折新の花ま

妻木こるへき

旅ゆく人の　宗條

ありけるかを分つてきたて見て旅ゆく人の袖やさむけき

ミやこハ遠な　汎葉

草枕野山をゆく人なれもミやこハ遠かゆかしの打ちハ路

うつる梅の月の　久見

春の花も月ハ入るゝ舟の跡にもれてよ風さへにつる海士の苫そふらし（られ）

舟に流す宿の　季賢

おのへの萩はよるの浪枕あらし浪よせかへるこゝろとて

浦の擣衣 季信

あか月の塩風寒く海士の衣うちなれて秋のよもすからの音

あかつきの雁 嘉貞

むさし野の草の枕に露ちりて吹く風に花とゝもにかへる

定めなき世の

三世の仏に 具起

過去現在三世の仏は皆これなるの法を法よりぞこれ

到りての代の 雅章

万民のたのしむ代の恵みはなるあしたゆふへや君にこゝろ

明暦三年正月十九日　御會始

亀万年友　御製

うこきなき代々の世の友か池水にすまむ亀のをの山はいふらし

四辻大納言公理

ゆるきなき君か代へし萬代もすむ池水に亀のよはひと

清閑寺大納言共綱

とめて見んよはひをいはと君か代は池の亀の萬代をそへて

久我大納言広通

池水にすみとりの亀も千代にまた万代かけて君をまつらむ

中御門大納言宗忠

萬代の限りハあらし関に絶ぬ亀のよはひハ君にゆつらむ

日野中納言資勝

万代の君かためとや三河の鶴かむれゐる池に住ぬへし

正親町大納言実秀

千歳経ん代々を君に契りてそ池にすむてふ鶴もしけらむ

菊亭大納言兼業

君をこそむれゐる鶴も池の水にすみて千歳の万代までと

実清

西三條実条

万代も絶せぬ鶴もいくちとせ君にかはらぬ色や見えける

勧修寺三位経広

いく千年ともにうかへる亀の上に山とあらはし君か代

山科三位言緒

うち渡す池の汀の鶴よりや君か代ちよをかさねん

飛鳥井三位雅章

万代と君に契りて住む池の汀の鶴の千世もあらむ

柳原中納言資行

氷とけし池の汀に万代のよはひを君にゆつりて

烏丸中納言光慶

万代を池の汀にすむ鶴の千たひ契りて山の影

藪中納言嗣孝

末永く契る心は池水にすむ亀の齢や君にゆづらむ

園 基福

ゆたかにすむ池のうへに照る月の千代の山のすがたもうつして

梅溪 俊房

君が代の名にながれてやせき池水にすむ亀の千とせの数をとりはべる

松木 宗條

万代を君にと亀も契るらん春の日池の緑にあそぶなり

持明院 三位基定

ときはなる池の春よりも千代をへて八百万代の亀もたのしみ

阿野 實業

いくかへり君にゆづらん亀の上に代をかさねても万代の春

岩倉 具起

あかず見む千歳の数をかぞへても池をめぐりて亀もや千代の春に逢ふらん

高倉宰相 永敦

よはひをば世々にかさねて池水に君が代ながく亀の住むらん

清閑寺宰相 熙房

君がよはひ世をへて千代の亀の上にいく代の山と池にすむらん

中院宰相中将 通茂

万代の春をかぞへて池水のみぎはの亀もあそぶなりけり

東園宰相 基賢

あふさみよ百乃浦まても万代かに数ふる亀乃上に浮せて
万里小路宰相右大弁雅房

君か代に猶幾代をへてすむ亀の鶴と遊し庭のいけ水
小倉宰相中将実起

契とや見て亀のよはひを我君か千代の数にくらへつゝん
梅溪右宰相季通

萬代と君に契てすめるしるしの池乃みきはに亀やすむ覧
正親町三条前宰相実昭

ふかき心は池のみきはにすむ亀も君や数ふる万代乃友
白川三位雅喬

わか君か代にはよはひとそ千代の松をまつね鶴亀のちきり
藤谷三位為條

萬代を君かなをや池水の中にみえては亀もすむ覧
水無瀬三位氏信

よはひ代にもすむ池の亀か契を見ても千年にかそへつゝむ
徳大寺中納言實維

万代も池にすみて住亀乃浮になれしや君か数ふる
舟橋相賢

ふかきは池のみきはを万代と君にかそへてまたやかさねん
柳正

君を見むは世よもしのふる心の底のかきりなき千年とそいはふ

資業

末とほき君かは代よ万代まて亀もよはひと祝てやまし

時量

万代をこゝろみよとてつくる亀の尾の山よつきせぬ声と祝て

實道

万代のためしへき世の亀とこそ祝ふ君かよはひを契る行末

言行

加ふへき千年も君にゆつりえし世々のまもりて亀の万代の声

経光

万代の声を加へて我君は世の亀とともに契る千年

公頼

萬代も君か代よまもる亀のよはひを契治まる千代

俊量

限なき君か代よ万代と亀もちきりてきこえむとしらむ

季信

万代をまもりて君かいはふのみそよされ亀もとも諸てしらん

季定

幾千年もかはらぬなと祝て亀のよはひを君そそへなん

基時

池のかにすむてふ亀を契りしは君とそ契れ萬代の春

資忠

あかぬ松君に契りて萬代の春やかさねむ亀の毛衣

為継

小さゝ波池のみきはにすむ亀の齢に契る君が萬代

有維

渕にすむ亀のよはひをゆつりおきて君もそへなん萬代の春

雅也

万とせのうちに成や亀の尾のつきいくかさねして世の君が代の春

通福

池のみに万代とつくる亀のよはひや君かよはひのかすなり

永俊

末遠くゆくへつきせぬ君が代は八百萬代は亀にちきるらん

為清

萬代をことしは池になれて亀もしるらへ君が齢を

昭房

契りとて御池の亀とそ思ひしれ君かよはひの萬代もへつゝ

永貞

萬代といはふとある春かひや君か池に亀さへすめらん

隆豊

池の水万代まてもすむ亀のつきぬよはひを君そ契らし

道晃

ことしより小松か枝にすむ亀の尾乃数をもかそへて君か ちよへき

慈胤

万代乃春をかさぬる門乃君かよはひを亀と松や契る乗

明暦三年正月十三日　裏亭會始

詠鶯有慶音

權大納言實豊

ときのこゑみ代をもいはふと宿のはなともさへつるこゑもかはらぬ鶯

正二位雅章

うくひすも九百よに住なれてあはれたのしき声よりや宿の松風（春イ）

權中納言資慶

あさみとりのとけき花になく鶯やいく千代とつけその声

依為逆可考

あはれあはれ小松かえに羽をもしれ千代の初音の鶯の声

權中納言嗣孝

万歳のこゑそきこゆる笛竹のよゝのなのみやまたはるのしらへを

俊廣

きみか代のかすも志らなみよせかくる松と竹とのゆくすゑのとし

家條

契あれや千里の春の庭のおもに立かへりつゝ鶴のかす

従二位基定

よろこひの春をやはらく此宿の庭の松のときはなる代のかす

家權

よはひをはのこしむかしやかはらて百とせつゝや宿のこと葉

具起

たはやすきまて庭の松かえ千世の色にうつるやとこそ宿のことの葉

参議右大弁雅房

おのつからにきはひてそきこゆん萬代の春をつけしむ鶯のかす

従三位　實昭

呉竹の千世のかくしも鶯もみさほにこゝろ深き代の雪

忠康

鶯のみちよしるこそきこえたにのまてこそなく鶯の数

利延

ゆくすゑのみよの春にちとせ遠鶯のこゑ初音をそめていまもなくなる

春日詠鶯二

桐賢

すくなしも我身にあまるき古代とちきらん宿の春ハ久し
詠し　時房
ゆきかへる宿世の行しさハ花常に君か汲しるけさの初哉
頭左中弁資経
咲そめる松は君か為にて万代とみきりにちとせふる哉
左中将實維
のとけしな新玉の梅の花の色そふる世とてや春は常の哉
實道
おもひやるちよの色は君て春の紅は花のさくら鶯のこゑ
蔵人頭右弁兼茂

さくや此花にあふとも色を契りて君ハ万代ふる宿の春の哉
内蔵頭言行
おもやとのこすゑの花桜にたちそひて千世を梢にちる鶯の哉
経光
咲そむるみきりの松に契りてや千世のためしを鶯の哉
左中将公親
万代の春の契りに此宿にあひてちとせの春をまちなん哉
左中将源俊房
きみしるちよの色の春に咲やこの花ハかはらぬちよの声
左中将定雅

いく千代の春のまとゐや呉竹に積りきてなれし鶯の声

左中将菅原基時

あきりも猶やなれ来て鶯もおもふ世の春のつらむ

右中　為継

言の葉のみちもしるしに住する宿のあるじはいく代の数

春日同詠ゝ

左近衛権中将藤原隆方

十かへりの松のみとりは今日よりは宿の春まちいてゝきく鶯

左近中将雅忠

ふたゝひと君も竹に鳴や鶯のこゑもきく所世の春につらん

詠

左少将宗量

行末を遠く契りて鶯も千とせの宿に流れ来ぬ春の初声

兵部少輔永貞

分て松の緑に住る鶯の千とせ経て名も宿を千世ぞ見ん

忠明

とめて来てこゝろ定めて鶯も万代まてと宿の行末

読師　　　正親町大納言
講師　　　雅直
発声　　　飛鳥井前大納言雅章

明暦三年二月十二日　水無瀬宮御法楽

霞中瀧　　御製

よしの山乃みねよりおちて瀧の音や霞のそらにひく糸のごと

梅薫枕　　穏仁親王

手枕にかをるにほひの志るき梅かいろに出て春の夜の枕

船花　　智忠親王

明くる迄ともしき花の山の端は霞も花の色にそへて

浦春月　　雅直朝臣

あまのをふねみちくる山の夕煙さしてたつ霞む月のかすむ

暮春雨　　公理之

たゝ見えも志たかく青葉の其のまに志らしとゆる花のかけ

郭公幽　　共綱卿

待かねにほのきゝともいはし明る夕くらき杜のうへの一こゑ

窓螢　　廣通朝臣

みえつゝも何をかやおもひのうちにもえてもえもきこゆらん

池蓮　　永将朝臣

小さゝ波も志まぬ蓮の露のうへにやとる月さへきよき色いもなき

荻告秋　　弘資卿

浅茅生ふる露も袂もおのつから夕の風に秋をやとる荻の音かな

嶺初雁　　熈房卿

雲のうへに思ひ出してみ山こゆるしたゆるやいつこに雁の一つら

夕鹿　　雅業

風さむき妻やおもへん妹の声に夕暮ふかき峯の紅葉

夜虫　　兼賢朝臣

物思ふ身の鳴く夜のやさしくも松のかけにいはゆる聲かな

暮秋　　通茂朝臣

色こそは志るしもそれをもとゆるをしむ入日の名のみに見え

松雪　　資行朝臣

志けしとてつもりそ松風のやまはれし雪の志つ

暁千鳥　　資堯朝臣

川ぞひにのこさ山をそのゝ春松ひのまつやまつまつらん

名所山　　嗣孝卿

よろ世流山の名見ゆかりて同じ名のかしとのこゝろ春の曙

山家梢　　基福卿

世に住ばさち〻我身人は栄え戸はあやすまじ梢は知

田家鳥　　雅喬卿

蒼ゆる田面をはるかにむれ来なき騒ぐ賤がかり庵

旅宿　　宗條卿

かり枕一夜のふせつきまてゆめの壺さまよひのあかた

祝言　　基定卿

戸さしなき世にあふ坂の名に流く行末とほき君がみくらし

講師　　資廉朝臣

奉行　　[illegible]野宮中納言

明暦三年二月廿日　御月次百首

元日宴

百數やこれはけさに四海集へ法ひとよりれ春まさるらて

鶯　　兼茂

ふかき代のこゑなかりしを引そへて春につたふる風を隔れ

春氷　　弘資

うらいけ汀も音立て日数へて氷のうちとくる池水

若菜

賭射

野梅

雉　　嗣孝

きゝもなく尾けゆくきゞすもれの方よりいくとも見書やこ尾

雲雀

いほりより又分いでゝ春風に飛くゆきもわすれ菜花

遊絲　　賀慶

春曙

遅日

志賀山越

三月三日

蛙

残春

新樹

夏草

ふる人のみちもなかまて跡の杉草むらも夏のゝ花姫ゝ花

賀茂季

鵜川

夏夜

夏衣

扇

あつき日ハしかも忘れん扇にたのむゝうつ程ぞ六月の空

通茂

夕

暁立

蝉

季實

定なき梢の風にふかれても花に遊ぶなる蝶乃こゝろ哉

残暑　蕪賢

秋の来るそよぐ此風を待わびぬ日の光あつさはなほまさりけり

乞巧奠

稲妻

鵲

野分

秋夕　垂賢

打なて山もとふかき夕露の枝見えて志らぬ小萩か秋乃山乃末

秋夕　寅都

何となく淋しさまさる夕暮のかなしさハ何とも秋乃ならひに

秋田

鴫

廣沢池眺望

蔦　　嗣孝

み山木にかかれる蔦もえ色ふかくけしきよはけにしなれお狩りおとし

梶　　實維

露けさはいつはあれとも七夕の梶原かけし色そことなるあまたへの朝葉

九月九日　　家條

千世の縁しはくらん物の君とて色とも露しるしまふの菊の盃

秋霜

暮秋　　季通

虫の音も花の千種とかれはてて秋のなこりの郁

落葉

残菊　　實維

うつろふも又一かたの色そ猶や好ましき霜のしら菊

枯野　　基時

虫の音も野への千種もかれはてて秋をしらぬの色に消るところかな

霙　　相資

山風のふきしくたりぬれてきて又夜は寒くみそれふるなり

野紅葉

冬朝

守松　　　　香信

木枯にそは淡く流れして氣色をさへ松にさむし北風の音かな

推柴

念表　　　　俊景

枚の庭小紅葉は雨やみて此さゆ積るも落く妙も消のちらいち　きれ

佛名　　　　敬廣

救くの三世乃佛をよそよそに家々に鳴らし

初悲

馬悲

少々

見々

為し　　　　通福

ちゐれのこまやかにちきりしく人の心わかる恋路なれとも

祈こ

契こ

待こ

偽も思ひより多きときて幾夜あかさす待明しらむ　季通

會こ

まちみしもあるしつくき寝るにおもくあかすれとも人に落る涙は　実起

別こ

乱こ

甲斐なき世にこそ忘れよりそ人志けなき思ひ果んとおもひしものを　実名

稀こ

絶こ

怨こ

旧こ

暁恋

あかしらむかねのひゝき悲しくもかへる別れを思ひつゝ然

朝之

又いつといふをまつかはかなき契の別つゝ涙す

昼之

夕之

夜之

老之

幼之

恋之

逝之

旅之

寄月恋

〻雲〻

〻風〻　　言行

終夜川風早吹そふかき秋の夕ざりやとなる風のたよ

〻雨〻　　資冬

忘れても見し人の心のいかにして袖の涙の雨もとやまね

〻煙〻

し山〻　　経光

命とさへ思ひあまりなれまて思ひのほかの心さへもあまりて心

〻海〻

〻川〻　　通茂

こさし流れてあふせかなしくはかなきに見し川の瀬ぞかなしき

〻関〻

〻橋〻　　嗣孝

あふことは絶えはてぬるをさそひつゝかゝる葛城の橋

〻草〻

〻木〻

〻鳥〻

公親

清かりし夕付鳥の影をさへともかこゝぬひとり禰もかも

〻獣〻

〻虫〻

〻笛〻

かくしふ人は清きこゑや笛竹のよ一よの命しも志らぬ歎き哉

〻琴〻

〻絵〻

実通

乱ても絵にかく川の流ても心にとめて筆と成けり

〻衣〻

〻席〻

こ遊女こ　弘資

人いのちも契るあともなし難波かたこと芦たつよれわたりぬるかな

こ傀儡こ　資茂

身は衣日もくれのかり枕なれはもとしらぬたちよりそ旅

こ海人こ

こ樵夫こ　萬菴

奥ふかき恵の山路れ山人の名も思ふ心こそなき物し

こ商人こ　教房

ある中に命とよふるなくはあらは秋の都しつよこ嬬の市人

奉行

阿野前中納言

明暦三年二月廿五日　聖廟御法楽五十首

初春松　　穏仁

うごきなき代のためしと山松乃枝をならさぬ春の初風

山春霞　　永将

雪うすく霞む外山の朝霞きにも春の色は見えそめし

袖梅　　実昭

立よりて袖にうつるや玉ほこの道ゆく人の梅のした風

春雪　　資忠

さえかへり又ふる雪の春なれハ花の枝やさらに咲まさる

柳風　　宣順

春風にみたれてなひく青柳の孫の糸はかへりそめけらし

牧春駒　　公信

雨ふれは今そゆふ草しけくなる小野の牧にあさる春駒

樹陰蕨　　弘資

春寒み山さへ宮の松陰にいつることしてをるさわらひか

羇旅　　季賢

公あてにかゝる旅ねも浮草とみえてゆく山路の宿をかるらむ

暮雲花

匂ひくるよそよりも小みなる色風吹は下もとゆかし花のたかねそ

梅花　　資凞

咲はなほまつしらん桜花かしこしてをりうつるなる色の枝

春田面　　時量

あさる雨に賤か衣もぬれにけりしたかへすを見るからに小田

行路躑躅　　有維

行るさとこゝちやゆきつゝ山ゆくかた咲分入つゝあかつかは

里桜　　雅陳

咲つゝけ鶯のなかに咲そめし今こそ初花の雪香にして

里郭公　　雅房

忍ひつゝこの里なる待よ郭公まつとかのなくへきかたも

早苗　　忠潤

小山田に水せきかけて月影のうつる稲葉ハやかて早苗なりし
言行

江夏月

名にしおふ玉江乃芦のふかきまて塵もかよハぬ夜半の月
季通

夕顔露

白露の光をそふる夕顔は志つかかきねのかさしをそ見る
俊量

氷室

吹風もさゆるひむろの山陰は夏まても残る雪の下水
通福

澗底泉

住なれて身をもかゝみし谷ふかき岩井の水の清き心は
為條

新秋

秋風の吹に涼しくなりぬとも見えてこそかつ散庭の萩かちる
兼茂

夕萩

とふ人をまちぬる夕暮に何かとふらむ萩のうは露
基賢

落穂

ほにいてし秋ハと見えしすくなくて野となる庭のおちほひろハん
隆方

秋夕

さひしさはいつくも同し中山とこの山陰の秋の夕暮
季信

暮天雁

なかなかに秋の夕日はかくれてや雲ゐの雁のたえたえて行
資慶

秋月

秋風に光をちらす浪の花かとしらぬ木の間の月や社ゝら

橋月　永貞

よる波や松風さそふ嶋まに月まちわたる天の橋立

瀧月　永俊

峰の雲も晴わたる月の影をおちみなきてくたる瀧の白糸

浦擣衣　公業

浪しつかふく河音浪にての浦まて衣うつまさる夜の浦月清て

湖雪　昭房

待いてん月やは晴よさ浪の池のつゝみにおつる夕雲

田鴫　家條

かけしは暁やまて起てそ紫の門田の西の鴫の羽かき

暮秋衆　為継

さ田姫みとりの松にまたえて錦おりなす秋のふかきも

初冬　兼業

冬来ぬとつけにきて遠しき山の時雨して

雪鷹　実郷

峰の雪に翅しほれてかりたつる山田をあさるたかの麻しき

松雪月　智忠

かけ風を氷やはらく松川の月をいつもわすれぬ山中

待雪　経光

夕まくれ猶山風を寒しとや松の戸わたるはあられなりけり

積雪　有維

白妙のみ山の風もさえてよの程に積しきれの白雪

雷散風　正親

夕立の雨気もせく檜山は清よる雷を誘ふ山風

神祇

いまも猶神代のまゝの道とかやそのふるきまれいさよしの神

寝覚恋　雅直

よしや今袖かわかぬ枕にはうき夜衣のなかの夢かし

旅宿　基晴

思ひやる袖の涙をこの夕かつゝきたにかゝる白露

白地恋　雅高

先立てやゝに車の下すたれかけてもみてかへるさの花

旅　有和

いそにつひかゝるをやすまぬ枕夢路へとつる嵐まかせて

片思　実維

甲斐なきやゝ人はわかぬを我ゆ川我のみ渕となるとてもかん

増恋　相貫

洗こけし洞をも流れも我しゝならぬの袖をぬらしぬる

夕樵歌　雅ム

夕ぐれは霞にうつる木末なれ共しらで雲かゝりけりたゞ一もと杉か

巌頭居　敬広

非常に揺つて風そよぐ岸の嶋の葦しげみ谷のあらしちるをちこち颯ん

名取斎　宗通

落さそめ露霜たりしまゝの宿なれや葉にうつるゝ露

河筏　重定

よし野川春まで宿れ花いさしい花と心に染やさるらん

園家　資宗

さむしさ寝覚の床や世をかなしむ人も見ゆる山風のひとり庵

竹ゞ為友　通益

かゝる人々世をのがれむ為にも又人にもあらぬ姿を

講師　萬葉

奉行　同

明暦三年三月十七日　御当座

春初雲　尭然

世にわけて霞の袖をたちそめしけふこそやはるの雲てうつてゐ宗

宮外梅　御製

あるし花ともなしに屋かけの月やとる軒はに宮の梅か枝

遠村柳　雅章

立のほるかすみのうちにたかつの柳もみえてをちの一むら

山花盛　雅直

咲あまる花よりたかく程まてかゝるにしらぬみよしのゝ山

暁春鶯　雅喬

鶯の谷の小川ハよ汲も世の花よりさきの春の日をしる

寄露恋　宗條

しら露を人のなさけと思ひきて袖の涙は露そひてさる

〻草〻　弘資

壁に生る草はなかなか露よいつとつまぬ中よき宿の

〻鳥〻　通茂

鳥も鳴しやまぬ声の夜のまにうつる音まてもかはるかな

〻船〻　具起

流るゝはいやまさりつる涙にはそれしかなき船をさへ見て悲しき

〻芝〻　為晃

人稀しあれてあやなあれ庭の夜の床たにしらぬまし

海辺烟　通福

あまの住里ハ山にいて浦ならぬにともえてくる藤しほの

山家松　為清

時ことに色そふ松の梢もあれ山住もまやとそなり

田家水　雅房

あき田のかりし田面の露をとの溝になかれてあれ水のゆく

旅衣　雅忠

うき旅の衣のうちもなるゝにとおもひたる人のなみたかな

寄花恨　豊仁

秋風のふきゆくたひに人さそふゆへさらさらとまねし家の志きしる袂もみよ

明暦三年四月十五日　御当座

夏雲　御製

陰もなき諸涼しく夏山乃みとりの小清しく雲の色かな

夏雨　冷泉中納言為継朝臣

夏山の木々のみとりにふるあめて風もさそひて見えつゝなるまし

川風　千種中納言有維朝臣

あつき日も暮ゆかぬに吹いてゝ袖に涼しき新乃山かせ

夕蛍　冨小路三位頼直

行かよふ蛍のゆく里やちらくにみゆる乃ふかきかな

夏月　伯三位雅喬王

あれはてし秋田のかつらの里はかけちて月に涼しき庭の光哉

飛鳥井中納言雅世卿

〻山

長の色は夕くれしく深くして夕ぐれにつゝくたと道の月

岩倉前中納言具起

夜泉

ともし飛ぶ袖にて夜は時しらぬ風も落くる雲のかしの根

徳大寺三位中将実維

〻河

高瀬さす吹く川風にむすひて袖涼しき瀬々河の波

八条の宮式部卿智仁

〻海

夕けやは浦月をくもりてよる浜のみるめ涼しき夜の波つゝ

聖護院宮道晃

〻里

草の屋のかはしも里はあつき日をといはきこみ山に入て蓍しも

園中納言基福

〻草

若菜つみ花はかさして此のよ色のよしや川と流に夏草

〻木

公秋朝臣

夕陰なる杜の木末を吹あはせて嬉しき風は涼しき

愛宕少将通福朝臣

〻虫

夕日影露やたりは夜山の声にこゝに小さけき蝉のこゑく

〻鳥

冷泉中納言為清朝臣

槙の戸をあけくる鶏よ夜の秋はきしる夜深のの名残ぞ

飛鳥井前大納言雅章

〻衣

吹くる浪ゆふへの夏衣かへる衣ほすまもなくすゝしき

〻枕　　俊廣

ほとゝきす夢よりやかてさめしよは枕さへ絶てこゝろ落し

〻莚　　烏丸中納言資慶

すゝしくや夜半しきぬる呉竹のよる枕に風を契りて

〻瀧　　妙法院文

白妙にうつ流るゝ砂の月よりも声すゝしくの瀧の糸そ涼しき

〻竹　　中院宰相中将通茂

えひの露先すゝしくのみ風まちにうつらふものゝ窓のくれ竹

〻船　　日野大納言弘資

行かよふ船や涼しき夕風を帆ことにうけて出る入江に

講師　　飛鳥井中将雅直朝臣

奉行　　上冷泉中将為清朝臣

明暦三年九月十三日　御当座十首

山杉樹　式部卿宮穏仁

花ならて木すゑやいつ迄色かへぬ山また杉はよつくかれ

採早苗　雅直朝臣

植やらぬあまたも此ころみなと田のさなへてもしほるわさや

河夏月　法大白三位中将實維

暮ぬより涼しさそへて舟とめて河風の流に月そうつらふ

夏草夕露　源宰相中将　中院通茂

夕くれやむすとのみよる比夜霜にあきさかひつる花の露かな

窓前螢　通福朝臣

たのまるゝ身なれとつらき誠行すゑや萬世はこゝろにみせん

不逢恋　　烏丸中納言資慶

さりともと思ふ年月ときをしなん玉の緒なからうきつゝ猶恨みん

契絶恋　　中院中納言通茂

こりしとは我ひとりこそ契をはかなしき蕎いかにあふみもかな

年経恋　　為清朝臣

いかにせん逢をみしよ下紐のとけてもいつか物思ふ身を

惜恋(?)　　隆豊

あかつきの枕にかゝる袖の上涙なりけりあかぬ別れ(?)

立名恋　　伯三位雅喬王

浅沢せはくもてしまるあし原のあまたのみにてたえすとくらん(?)

蘆葉霜(?)　　園中納言基福

秋の夜は山かけの浦(?)をとしはしと鳴らすも夢の世にてさめにけり(?)

塩屋煙　　公規朝臣

立のほる煙はよそに見えなから海士の塩屋にこゝろしらるゝ

谷樵夫　　御製

白雲のふかきみ山のかつ今は坂をとかして帰る山人

夏眺望　　岩倉前中納言具起

奥津風こゝろも涼し住の江の松にむかふる浜風ふくらし

社頭柳　　日野大納言弘資

神路山よ世の色そへみさきはや君か恵の陰そしるし

出題　飛鳥井中納言雅章朝臣

奉行　三条大納言

明暦三年五月廿一日　御当座廿首

夕鶯　御製

ことわりて居りやうらん名残の夕暮は山と鶯なくなく

猶花　俊広

あかなくに色は紙花の上にいかに頼つきまれはてる

籬款冬　具起

幾春をかさりし跡や夕暮のうらむまては山吹の花

時鳥遥　実維

待してもなほまそこへ絶一声はそれのみそれは山のいさ須

杜蝶　為継

村雨のなごりの風よりて蝶のとまりわけ行杜の下露

萩風　　有維

ことの葉もなびかぬほどの風なれど萩の葉すゑによる音かな

雲間月　　滋豊

雲はれし又下ゆく山村雨の跡見えていつる林の端の月

夕紅葉　　雅直

いろふかく秋の色そふ夕日影はえて照そふ木々の紅葉

寄草　　資業

とふ人を松虫とてもまたれしものを音にたえぬ秋の風の音哉

野外霜　　嗣孝

行人の跡見えしぬまで降る雪にさながら白き山かけかな

寄鏡恋　　雅喬

せめて心も影となりても面かけのうつる鏡にむかふともかな

〃枕〃　　基福

はかなくも契りしよゝの枕かな枕の夢もさめてはかなし

〃莚〃　　雅章

名残あれや思ひてもしきそふ夜はの袖ぬらすさむしろ

〃船〃　　公規

契りなき身をうき舟のいつとなく人を涙にまつかひもなし

〃玉〃　　通福

玉の緒のことも斗にかけてあらぬつらさに絶もこそせめ

浦松　　為清

よせくる浪にかへりてなつかしき松も一しほ志賀の浦風

草庵煙　　弥資

うきにこる人もこそとへや草の庵の朝夕川の遠く村の烟

旅宿夢　　照房

草枕山路たどるも人ゆきてゝし松の葉を見る夜はなくて花

眺望　　雅房

稲田の原見わたして涼し夕附日いなせより浪に続もしるして

神祇　　通茂

君が代を守らんかけし尽ぬ縄のむさきくにつまる神も

右歌　　雅也

三条大納言云

具起

右歌ぬる勅題の際のつきさへ浮ふさかりの山ふところに又

右之寿御製依同前而増改之清書者也

明暦三年六月廿五日　聖廟法楽五十首

関早春

東路にけふこそ関のとたえても霞やよそに春を待らん

穏仁

新鶯

花またぬ軒端より出谷の戸に今日氣小消つるかにうくひすのなく

尚晃

梅薫枕

かきたえし枕にちかき梅か香そうつゝにかへる夢の花に嬉し

智忠

柳靡風

さしかゝる岸根の波の春風にゆらくかと見し青柳の糸

晴房

子蕨

初しほにあはらに織くれてこゝらの山路そ色よ紅葉しき

庭春雨　　季定

軒端を洩雨の下にうつし洩来の庭の袖るは春雨の音かな

見花　　芸綱

かきりある花九ゝきのもの春にらしわかに流ゆく花の色香哉

帰雁幽　　廣通

契せす月を残して別帰る雁見送る空のそこはかとなく

歎久露　　宣胤

末摘の花も春のこゝにも露も淡ハいとゆふも甘よ頃

惜春　　弘資

くれて行はるのよそて別わる日数けふはかな春のわかれは

時鳥　　俊景

まちまてハ思ひの山のほとゝきす深山にいつも深き初音まし

早苗　　兼業

作るまとたのめ志つきの時とやみなしいとなみて早苗とるらん

照射　　具起

ほこらすやましかたのしのつまかもはまよそにほくしさすらん

瀬鵜川　　基賢

篝火はゝ風の浪よるはしも鵜かさしつる見せ哉

夏草　　宗貞

夜るとるもたちいりてこゑや咲ぬへし花の枝折庭の夜半

杜蟬　経廣

空蟬の世をさる身ものかゝる夢し声も杜の木つたひ

松陰泉　基時

立よれは夏忘袖て松陰の岩こゆる清水音も涼しき

風告秋　雅章

このまもる初秋風を吹かける身にしまても色を見えぬを

隣家萩　雅房

となりのと我かへて落まて中垣を吹こす萩の風をまつかな

野径薄　資行

ゆきゝの袖にうつしおきまとの秋野にいかく織さらして錦なるとそ

山嶺康

聞虫　嗣孝

秋かせの花まく葛か原の夕風にさそはれこし顔なる虫の鳴なる

暮月　基福

蛛蛉の花松蛉の風も志つかにて暮色の宿の月ぞすむ

田家雨　公径

とめ行ぬ賤か家の音ともを蛛の音まて袖をぬらし稲葉にふる雨

擣衣稀　資忠

秋風のふくにさだまらぬ浪の花や残りきぬらむ稀なる

花葉　　資名

しぐれくもいりの人またそめつらん河の上もやどにちる庭の紅葉

水落葉　　湛房

河すかにも今ハ名のみとなりて流乃寄る白菊

落葉　　忠和

三山路の岩根みどりを隔へて嵐に落葉のちりぬる

野霜　　通茂

百種ハ枯るゝ色なれ霜に今むすぼれて下る庭のむさ

閑夜　　為経

幾夜かは河の流の音信て萩も乱るゝ神やの空けさ

松下雪　　公業

数々も言葉の種ハ神も見小松る一夜乃松のしら雪

千鳥　　実郁

風あらく吉浦ちよ千鳥けん浦にちる浪もむかしさわぐらん

神楽　　有能

諸人のかなでる神楽も星の光とて浦の明かさなる

山家霜烟　　季通

山風にたつくるまつの色浦くも雪に定けれ也苔の岩の

閑始夜　　実昭

たりし葉をはの露をかけてかく袖の涙とこそしらるつる　雅陳

平思恋

わらきかくの涙よりこそ深けよはそても人もしるへきにかはいと　雅喬

夜恋

まじやいかに君と秋風の吹そめて心の葉もいろかはるらん　雅喬

恨身恋

はらしとて人をも恨みし数ならぬわか身を浦の浪ぞいつるに　有維

色恋

うちとけは紅織らてさしものこころ恨みと消梅しき　実維

依胡恋

桐賢

道芝のよきはい消えてわか袂こしるにも山路の露のおきまかへ　公規

偽恋

さかえもの御代に玉ゆらし言の葉の文備とかるゝしるの花　敦廣

祝

ふりそめてかくは消えし新枕くらく後の雪とし見よ　時量

嶺雪

いはけふかの岸をさして吹し嵐とともにみねの音つる　資慨

谷風

初瀬山秋やよひく谷せてみ吹の山る風そ嶺に涼し花　隆

巌上苔

山ふかくすみける人も今こそは岩ねによする苔の莚そ

朝旅　　雅直

秋ふかき野らの笹原露分て錦の袂も裏も表も

山寺　　通福

多くの夜を心のとりのなくなくも山の寺の鐘のおとかな

暁漁火　　言行

海士のすむ芦屋のいさり風寒て星をともなふ暁のそら

神社　　経光

かしこきは神のみかけのたえせすも松のおくにある朱のいかきは

慶賀　　為清

神の代のゆたかなる世にあふ坂の世の恵はいかにしるへし

右訖　　為清

奉行　坊城中納言

明暦三年八月尽夜　御当座十首

八月尽夜　　智忠親王

秋はそらに光もかはりて名にたかき今宵の月ぞわけてさやけき

月前雲　　雅章

秋風に月ともろ共に晴れてあかずもかゝる雲里の空とまらん

月前時雨　　雅喬

はるゝまも君が月の影をとゞめてあらしは松に志ぐれて

月前萩　　俊広

ことの外花にて匂ふ萩の戸の月や世にしく光そふらむ

〻浦　　為清

秋の野乃ちくさしろみ玉露小萩よりうつる月にてぞみる

禁中月　家條

なれしあふ秋の半の晴てかくしく庭に月も心や宿りぬ

花落月　御製

おもひやる明石浦乃遠きは海山こえてよひ旅乃月にむかひて

寄月旅　弘資

まさ紀名を世にうつされよ硯袖の露もとめしかはしめ　月記

ここ旅　具起

草海乃古つ人の面影も月よりさきに昔をしたてし

ここ祝　雅直

たる海豊なる代乃光を君かに遠ふてしたふ月もちり光を千代の月

講師　為清朝臣

発声　飛鳥井中納言雅章朝臣

明暦三年九月十三夜　御当座廿首

十三夜月　　聖門主道晃

ちかひの入座あふけはことしの名かけし千里にかはらぬ月の影

待月　　姉小路
左大弁宰相雅房

秋風もさやけき夜はひとへにてまちえてし月の影はさえけり

松月　　烏丸中納言資慶

木のまもる光にまつの松かけにかゝる袖の空の月の影もさやか

竹間月　　上冷泉中将為清朝臣

うたゝねもさめて竹の葉にもる月の光にさめて夜半の風

暁月　　八条式部卿穏仁

なつ山の月もいふとたりはやなきをしのゆきさき花の里

山月明　姉小路中納言實久卿

初せ山尾上にゐるてたまさる法の影もさる秋のよの月

河月　妙つき光院

みつ浪の影もさえて清川月のまへにみえけるかな

池月　御製

さゝ浪のよせくるみきは氷かとみるまて清池の月影

野径月　千種中納言有維

行袖はこほれやとし武蔵野の草葉にやとる露の月影

関月　岩倉前中納言具起

すまの浦に月にかゝりて旅枕とけて寝ぬ夜の下にかよふ夢

海辺月　七条少将隆豊

あはれなる月のよ雪かと見えつゝもわかれて清見かたの海のうへ

湖上月　北小路中将　西福卿

月はなをひかりもあかし小浦の海つらに沖行舟もさやかにみえて

田家月　飛鳥井中将雅豊朝臣

秋と深きを床に小山田の庵にも心すむる月やかけらん

旅宿月　新中納言実維

明ぬとも山路の露をはらふ草枕しつかなる月のかゝりに

月前祝　源中納言通茂

あふくらし墨なきよの秋の風ぞ涌乃外も知らし　光丹

和學講談所

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan